

【初等中等教育における探究学習への支援プロジェクト】

中学生の「子どもの声を聴くこと」に関する探究学習に、大学院教育学研究科の浅井 幸子先生がアドバイスをを行いました

2026.1

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター（CASEER）では、「初等中等教育における探究学習への支援プロジェクト」において、児童生徒の発意や関心に基づく探究学習に対して専門の研究者が的確なアドバイスをすることにより、探究の成果をいっそう高度で充実したものとすることをねらいに、東京大学の教員もしくは大学院生がオンラインを通じて支援・指導を行っています。

今回は中学2年生 K さんの、子どもの声を聞くことに関する探究プロジェクトを通して出てきた疑問や悩みに、大学院教育学研究科・学校教育高度化専攻教職開発コースの浅井幸子先生がアドバイスしました。

探究のテーマ：子どもの声を聞くことについて

- ・相談者：K さん（中学2年生）
- ・探究学習の取組単位：個人



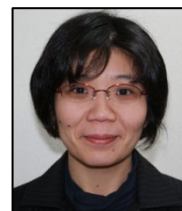
アドバイスした人：

東京大学大学院教育学研究科 学校教育高度化専攻
教職開発コース 浅井 幸子 教授

[専門] 教育学，保育学，教師教育，教育方法学

[研究テーマ] 教育実践の歴史的探求

→[浅井先生のページへ](#)



コーディネーター：教育学研究科 本田由紀教授（CASEER センター長）



子どもの話し合いは、本当に自由で主体的なものになっているのか

Series 6.子どもの声を聞くことについて

浅井先生：まずは、K さんからご相談内容をお話ししていただいてよろしいですか？

Kさん：はい。私は来年の自由研究で子どもに関するテーマについて調べたいなと思っています。今年度、住んでいる区の子ども会議の委員として、実際に会議に参加したりしているんですが、その話し合いの時間に区の職員の方の問いかけや、会議の中で声の大きいメンバーの意見とかによって、話の流れが少しずつ決まってしまうということに違和感があって。参加してる子どもたちはみんな自由に発言してるように見えたんですが、大人の雰囲気とか場の感じによってある程度決められているように感じられて、結論が決まったような話し合いをしているように感じたんです。このような体験を通して私は、オンラインの学習とか、デジタルの教材が結構今広がってると思うんですけど、その時に子どもが迷ったり、自分だけの工夫とか発見をしながら考える時間ってというのが少なくなってるのかな、あらかじめ学び方のスタイルが決められているんじゃないのかな、という点に興味を持ちました。来年の自由研究の時に実際の教育現場にもし行けたら、インタビューや観察をすることを計画しています。具体的には、例えば幼児教育とか小学校の観察であったりとか、教員や保育者の方への簡単なインタビューとか。また、春にカナダのバンクーバーに留学するので、そこの教育現場との比較をしたいなと予定しています。今回の調査は自分の感覚や疑問が最初の出発点なので、理論的な観点とか、様々な視点が少し不足しているのかなと思っていて。自分一人ではただ興味深かったということで終わってしまうかもしれないと思いました。なので、そのような研究をされている研究者の先生にお話を伺って学べる機会があって、とても嬉しいです。よろしくお願いします。

浅井先生：子ども会議の中で、実は大人が結論を決めていて、それに沿った議論をしているのではないかというのは、すごく大事な感覚というか。実際にそういうこともあるのかもしれない。そういうことについて考えるための材料をお渡しできればと思っています。調査については後から少しお話ししようと思いますが、子どもはやっぱり弱い存在、ヴァルネラブルな（傷つきやすい）存在なので、調査や研究において子どもを保護する規定があるんですね。研究するときに、例えば私たち研究者も子どもの写真を撮るのはすごく厳しくて。保育園や幼稚園に入るのも、日本よりも海外の方が外部の者をなかなか入れてくれないところがあるので、そこは準備も必要になるし、もしかしたら違うやり方を考える方がいいかもしれない。例えば、公園で子どもがどのようにして遊具を使っているかを検討した卒論生がいたんですが、その時にその区で許可を得てやっているんですね。もし親御さんから「何をしているんですか？」って言われた時に説明できるように準備していないと、小さい子を観察するっていうのは通報されかねないところがあるので、その点についても一緒に考えられればと思い

ます。

Kさん : はい

浅井先生：いただいたメールを元にパワーポイントを準備していますので、共有しながら会話していきたいと思います。

1) 大学で研究をされる立場で「子供らしさ」という言葉はどのようなことを指しますか？

「子どもらしさ」とは大人が「このようになってほしい」と思う理想の姿なのか、子供が生まれたままの本来の性質なのか、どちらですか？どちらも指すような印象を持っていますが、国や文化によって違いますか？例えば、Youtube Kidsや子供向けアプリは大人が子供に見せたいと思う内容が主で、年齢や好みが様々なすべての子供達が興味を持つことができるとは限らないのかなと思いました。

問いかけ

- 「子ども」って誰だろう。
- 大人が子どもに何を見せたいと考えるかということと、子どもが何を見たいと思うかということは、切り離せるのか。
- 「子どもらしさ」 childlike (子どもを理想化する) とchildish (子どもを未熟なものとして捉える)

その後いただいたメールの中で、子どもらしさってという言葉はどういうことを指しているかという問いがありました。これは先ほどの子どもの声を聞く時に、声の大きいメンバーの声がどうしても通ったり、大人が決めているルートっていうのがあるんじゃないかという感覚とつながるところなのかなと思います。一つはこのような問題は、実際に子どもがどのように捉えられてきたかという歴史の中で、「子どもって一体誰なんだろう」、「“一般的な子ども”は一体いるのか」っていう問題と関わると思うんですね。子どもって誰だろうと聞かれた時に、Kさんはどういうふうに考えていますか。

Kさん : 私も今子どもなので少し難しいんですが、いろんなことを学んで自分なりに色々迷ったりしながら、新しく発見とかしながら学んでいく権利があるようなものかなと。

浅井先生：そうですね。今のお答えだと、一つは確かに子どもにはそういう権利が守られるといいなと思いつつも、じゃあ大人はいろんなことを学んだり、迷ったり、発見したりしない存在なんだろうかと問うたときに、どう考えますか？

Kさん : 大人も迷ったりすると思いますが、でも大人だといろいろ知っているけれど、子どもだったら最初になかなか知らない中で新しいことを発見する点が違いか

なと思います。

浅井先生：そうですね。実は、今のやりとり自体が学問的にも問われてきたところです。教育や学習は子どものものとされていた時代があるんですが、それに対して1970年代に生涯教育とか生涯学習って言葉が登場して、教育や学習が実は子どものためだけのものじゃなくなったっていう、歴史的・社会的な背景があったり、発達っていう言葉一つ取っても、もともと発達心理学というのは児童研究、児童心理学からきていて「発達する」というのは子どものものでしたが、それも1950年代ぐらいから徐々に生涯発達という学問として成立していったっていうプロセスがあって、学ぶとか発達するとかいうことをめぐる子どもと大人の境目って、学問的にもすごく議論の焦点になってきているところです。今、明確にこうだよっていうお答えを示すよりも、そうやって議論されてきているということをお伝えするのが大事だと思うので、ぜひそうなんだって考えてもらえるといいなと思います。

Kさん：はい

浅井先生：まずはその境目を巡る問題。それからもう一つ、問いかけの中であった、大人が子どもに何を見せたいと考えるかっていうことと、子どもが何を見たいかって思うことはどのぐらい切り離せるだろうか。これについてはどう考えますか。

Kさん：切り離せるのか…

浅井先生：全く別のものとしてあるか、それとも大人が見せたいと思うものを子どもも見たいと考えるようになるのか。

Kさん：私は大人が子どもに見せたいって思うものは、自分の体験になりがちかなと思います。実際そうであれば、子どもが何を見たいかとは違うんじゃないかと思いました。

浅井先生：じゃあその場合、子どもが見たいと思うものはどうしてそれを見たいって思うようになるのかな。

Kさん：うーん。そうですね。えっと…子どもがどうして何かを見たいと思うようになるのか？

浅井先生：そうそう。例えば音楽だったら、大人が聞かせたい音楽と子どもが聞きたい音楽はたぶん違っていると思うんだけど、それぞれが聞きたい音楽はなぜ違ってくるんだろう。

Kさん：えっと。子どもは自分の居場所があるのかなと思って。例えば私の周りでもけっこうインスタとか TikTok とかを使ってる子が多いんですが、そういうのは親とかに制限されてない形で自分の表現をするための SNS だと思うんですが、やっぱりなんていうか、自分の居場所が欲しいのかな。

浅井先生：そこは子どもたちだけの世界で大人って介在してないのかな。

Kさん：大人はいるけど、SNS だったら自分と同世代の人とかとつながることができると思うんです。そういうので自分の居場所とかを作れる、出せるのかなと。

浅井先生：じゃあ、その SNS を設計している人とか、そこでの文化的なコンテンツを配信している人たちっていうのは大人でしょ？

Kさん：はい。大人…。確かに大人が作っててっていうことですよね。

浅井先生：うん

Kさん：もしかしたらそういうふうに発信してる立場の大人の方は、教育のためになるとか、子どもたちにすごく見せたいとか狙ってやってるわけではないのではないかと思います。その人たちもその人たちで、自分が楽しいって思うことをたぶん発信していると私は思ってて。だからそれが子どもたちも「あ、私が好きなやつだ！」みたいにどんどん発見していくっていう感じなのかなと思います。

浅井さん：なるほど。今のお話で、Kさんが問題にしているのは、大人の教育的な意図と
いうか、純粋に大人か子どもかっていうのはもちろん今お話していたように分けがたい、子どもだけの世界っていうわけではないんですが、でもその教育的な意図を持って作られているものと、そうではないものっていうのが今考えられているところなのかなというふうに理解しました。本田先生、もし何かあれば。

本田先生：浅井先生が問いかけてくださっていることって、たぶんKさんの質問が、子どもには子どもの純粋な世界があるって思っていることが前提となってるように

見えたので、そんなふうになんと切り分けられるかな、子どもだけの純粋な世界があることを前提に考えていいのだろうかという、おおもとのところをもう一回よく考えてみてはどうかという促しをしてくださったのかなと思いながら伺ってたんですけど。

浅井先生：ありがとうございます。どうかな。

Kさん　：うーん。確かに。子どもと大人みたいな区別で切り分けて考えていたかもしれない。

浅井先生：ただ、それでも子どもたちの作り出すものを大事にするか、そうではないか。例えば SNS が、子どもたちが自分たちの世界を作り得るような場所になっているっていうのはそうかもしれないけれども、それは本当に子どもを大事にしてくれるような場所になっているかどうかっていうのは、少し難しいなと思う部分が、大人の立場から見ると思うところはあります。でも、子どもたちが自分たちのものだと思うようなものを、大人がサポートをすることができないとは思っていないので、その複雑な関係の中でも、子どもたちにとって大事なことが大事にされ、子どもたちの発見っていうものが大切にされるようなことがどうしたら可能かっていうことを考えられると思っています。だから、分けられないっていうのが主眼ではなくて、その先がある。分けられないけれども、「でも」っていうことを考えてもらえるといいかなっていうのが一つです。

Kさん　：はい。

浅井先生：もう一つ、これは子どもらしさという言葉に関してですが、子どもらしさの捉え方として、「子どもらしさ」と、「子どもっぽさ」という、日本語でいうと 2 つがあると思うんですが、英語にするとチャイルドライクとチャイルディッシュっていう形で考えた時に、チャイルドライクっていうのは、子どもの子どもらしさを理想化する側面がある。で、チャイルディッシュっていうのは子どもっぽさなんだけれども、子どもっぽいっていう時って、子どもを未熟なものとして捉えている。どちらにしても、子どもを理想化するか、未熟な存在、不十分な存在として見るかになっていて、一人一人それぞれ違う存在である子どもには触れていかない感じがあるんですね。子どもを理想化する方っていうのは、歴史的には子どもは純真無垢な存在で穢れていなくて、と考えてきたけれども、子どもは別に純真でもないし、意地悪だったり、悩んだり、この世の中でいろんなことを考えながら生きている存在だし、じゃあ未熟かっていうとそうでは

なくて、大人だって知識は増えるかもしれないけど未熟だったり、そういう意味ではどちらも子どもっていうものに触れていかない感覚というのがあるなと思っています。これは最初の、子どもって誰だろうという、それぞれ違う存在である子どもっていうのと、「子ども」っていう風に大ぐくりにした時の、例えば世界的にはすごく貧しい国だったら、児童労働があったりだとか、それからまだ子どもって言われるような年齢で結婚したりだとか、いろんな子どもの姿があり、先進国では先進国で経済状態によっていろんな状況に置かれている子どもがいて。大ぐくりにした子どもっていうのは一体誰なんだろうという、これはKさんが言っていた声の大きい子の声が通っちゃう感じがするという事とも関わる事だと思うんです。いろんな子どもがいる中で、子どもの声を聞くと知っているけど、そこで言っている子どもって誰なんだろう。聞かれてない子どもの声っていうのがきっとあるんだろうという問題とも重なってくるところかなと思います。この子どもを理想化するか、子どもを未熟なものとして捉えるかという 2 択が、先ほどの子どもの声が大人の方で実は決められているんじゃないかっていう感覚ともつながるところなのかなと思います。割と難しい本ではあるけど、カニンガムの「子ども観の歴史・社会史」あたりは、中学生でもとっつきやすいかな。このスライドに書いてあるのは、いずれも子どもというのがいかに歴史的に捉えられてきたかということを論じている本になるんですが、もし関心があればどういう本なのか調べてみたいと思います。

Kさん : はい、ありがとうございます。

子ども観の歴史にかんする本

フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生：アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』（杉山光信・杉山恵美子訳）みすず書房、1980年。

ヒュー・カニンガム『概説子ども観の社会史：ヨーロッパとアメリカにみる教育・福祉・国家』（北本正章訳）新曜社、2013年。

本田和子『子ども100年のエポック：「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで』フレーベル館、2000年。

子ども

生物学的な子ども（ただしそれを明らかにすることも文化的な営み）と、子どもをめぐる文化、制度、物質等の関係性の絡み合い

浅井先生：生物学的な意味では、生まれたての赤ちゃんが非常に未熟な、一人では生きていけない存在、ということを否定するわけではありません。だから生物学的な子どもを捉えた時にある種の未熟さを否定するわけではないけれど、子どもは何歳までって定める法律とか、国際的な条約とか、そういった文化や制度で子

どもってというのはどういう存在かっていうのを決めているところもすごく大きいと思う。それに、生物学的なものを明らかにする研究っていうのも文化的な営みなので、純粋な生物っていうのを私たちは取り出すことはできないんだけど、それらが絡み合ったものとして子どもを捉えていくっていうのが、今の研究の中では中心になってるかな。子どもの権利っていうのもその絡み合いを作る一つの重要な軸になっていると捉えられると思います。ここまで大丈夫ですか？もし聞いておきたいことがあったらどうぞ。

Kさん：ありがとうございます。本をたくさん紹介していただけたんですが、本以外にもおすすめのインターネットとかで調べられるものはありますか？ サイトとかです。

浅井先生：どんなことについて調べたいかによりますが、先ほどの子ども会議での違和感という点であれば、子どもの声を聞くというのはどういうことかについての議論があります。日本では、子どもたちが自分たちに関わることについてどう考えているか聞かなきゃいけないっていう子ども基本法ができたのが 2023 年なので、ようやくそのようになってきた。これについては国連で出された子どもの権利条約が基本になっているから、ユネスコのサイトとか、それから子ども家庭庁のサイトにも子どもの声を聞くということについて出ています。でもやっぱり先ほど言った、誰の声なんだろう、ということについては、子どもの声をめぐる研究を探してみると出てくるかなと思います。

Kさん：ありがとうございます。あともう一ついいですか。私は海外に住む友達もいて、インタビューができるんですが、そういうのはデータになりますか。何カ国かにいて、一カ国なわけじゃなくて。だけど（各国に）一人だし、研究する場合はどうやってまとめるのかなと。

浅井先生：じゃあそっちの話に進みましょうか。一つは最初にも少し言ったけど、日本の中でも子どもの姿を観察することは問題にならない形でやらないといけないので、これは注意深くなった方がいいと思います。実際に行う際には、承諾書とか倫理審査などが必要になってくるんですね。私たちが研究するときには。子どもに関しては、やはり比較的厳しい審査が入ります。なのでもし、例えばカナダに行った時にそういう調査をしたいとかであれば、留学先にきちんと相談してセッティングしてもらえたらやる、という形で。出会った人、居合わせた人、たまたま公園で見かけたとか、図書館で見かけたとか、そういうところで観察するのはやめた方がいいです。

2) 春休みにカナダに短期留学に行くので、子どもの姿や子どもに見せる世界の違いを調べたいと考えています。

調査方法について、自由研究や論文にまとめるためには、どのような調査をするのが良いと思いますか？

3) 居合わせた人や見つけた具体例を観察する方法は具体的になってしまいい、論文や研究に使うための「データ」にはならないのではないか、と思いましたが、どうですか？

そのようなやり取りや観察を論文に使う場合どのようにまとめまるべきですか？

4) 逆に、これはしなくてもよい、という作業があれば教えてください。

「子どもの姿」 → (実際の子どもを相手にして) やるべきではない
行う際には承諾書、倫理審査等が必要

「子どもに見せる世界」 → 可能性あり、どこに見ることができる？

Kさん : はい。人を観察できたらいいなと思っていたんですが、例えば図書館とか博物館とかの子ども向けの施設が日本と違う展示方法なのかなって。そういうのを調査するのもいいかなと思っているのですが、それはどうですか？

浅井先生 : それはぜひやったらいいと思います。特に海外では子ども向けの展示は様々な形で工夫されているところがあるので、調べてきたら面白いことがいっぱいあるのではないかなと思います。

Kさん : はい、ありがとうございます。

5) 私は初対面の小さな子供達と話をすることも得意なので、子供の気持ちを理解して代弁しやすいと感じています。

また、私自身も小学校3年生の時にコロナ休校や急に進んだオンライン学習など小学校の体験もまだ記憶しています。今も社会の中では「子ども」なので、その立場だからこその強みを活かした内容にできると良いのではないかと考えています。

中学生の時期にしかできない内容やテーマについて何かアドバイスがあれば頂きたいです。

- 大人の研究者のインタビューと中学生どうしてインタビューした時に、聞ける話は何か変わるか。
- 何を聞きたいか・・・何が問題？何に寄与したい？

浅井先生 : 次に、中学生の時期にしかできない内容やテーマについてですが、例えば私たちが中学生にインタビューした時と、中学生が中学生にインタビューした時って、聞いている話が何か変わるか、ということについてはどう思いますか。例えばKさん自身が同じ中学生の子からインタビューされた時と、大人の研究者

からインタビューされた時とで、同じ質問だったとして、答えが何か変わってくるかな。

Kさん：私がインタビューされたらって考えてみると、私はこの前の子ども会議と同じように、やはりこのようなことを研究されている方だったら、言ってほしいものとかがあるのかなとか思ってしまう。研究者の方だったら少し答えを合わせる感じになってしまうかなと思うんですけど、もし中学生の、例えばお友達にインタビューをしてみるとかであったら、本来の気持ちが聞けるのかなというのはいいます。

浅井先生：なるほど。本音でお話できるっていうことかな。もしそうだとすると、それはKさんが話を聞いた時の強みになると思います。大人の研究者だとなかなか接近できないような、そういう中学生の声を聞いて、それをまとめる、伝えるような形にしていく、ということが出来るのかなと思うんですけども、その際に何を聞きたいか、何が問題だと思っていて、何に寄与したいんだろうっていう点が大事になるかなと思います。その辺についてはどういうふうに考えていますか。

Kさん：うーん。どのような内容や目的のインタビューをするかっていうことですね。

浅井先生：えっと、最初に子ども会議で、大人が欲しいと思っている答えに合わせちゃったんじゃないかっていうことがあるとしたら、もしかしたら違う答えがあったかもしれないっていうことですね。それはいろんな人に聞いたら違う声が出てくるんだろうか。その子ども会議では、何を聞かれて発言しにくかったり、大人に合わせちゃったなって思ったりしたのか。

Kさん：区が国際化をしたくて、外国人と一緒に共生するためにどうしたらいいと思いますか？何をしたらいいですか？あとはどのように区でアピールをしたらいいかと聞かれたんです。そもそも（子ども会議に）行った時に、いろいろな中学生を集めていても、そもそもそのサイトを見つけて応募してそこに行くっていうことをしている人たちだけだから、ちゃんと本当の子どもに全員聞けるわけじゃないのかなっていうのは思っていました。実際にそこに行った時に自己紹介を最初にしたんですが、全員公立じゃなくて私立の学校に通ってたんですね。すごいびっくりして。ちょっと話が逸れちゃうんですけど。

浅井先生：いや、逸れてない。

Kさん：それでその一人のメンバーが、「私は何年か前まである国に住んでいた。その国ではこうだった。だから、ここもこうすればいいんじゃないか」みたいな意見を出してくれたんです。他のみんなもいろんな意見を言ってたけど、その外国の話はなかなかみんなが言わない、「へえ〜」てなる経験じゃないですか。だからその意見に先生方も目がいて、たくさん話し合ったけど、その意見が結局グループのまとめとして発表されたりして。あと、自信を持っていっぱい発言してる子がいて、その子は自己紹介の時に「私はこの子ども会議への参加が2年目なんだ」って言ってたんですね。その子の意見も結構大きくて。だからその子の意見とか外国にいたことがある子とかの意見に従いがちになっちゃって。他の子の意見とかを出そうとしてもその目立つ子の意見が大きくなって、いっぱい深掘りされてるんですよね。だからなかなか新しく言いにくい、そんな感じでした。

浅井先生：すごく重要な観点だと思うし、今お話を聞いていて、Kさんにとってはそもそも公立の学校の子たちの声っていうのは、どうなってるんだろうっていうことと、私立出身の子たちで応募してきているという制限がある中でも、特定の子の声が強くなってしまいうっていう二つの問題で、やっぱり誰の声なんだろうって考えてしまう、それは大切な問いだと思います。

Kさん：はい。私がある時感じたのは、元々外国にいたことがある子とか、そのいっぱい言ってた子が（意見を）拾われてたのは、区の人が求めてる、実際ちょっとこういうのが出てほしいなみたいに求めてた声だったのかなと思って。

浅井先生：それに関しては、区の人がどの程度までオープンだったのか、求めていた声だったから聞いちゃったのか、それとも新鮮味があったから聞いちゃったのかっていうのは、聞くということのある種の難しさに関係しています。また、カリン・ムリスという人が、ミランダ・フリッカーの『認識的不正義』っていう本をもとに述べているのですが、未熟とされた者の声っていうのはなかなか聞かれないという議論があって、子どもの声はそもそも、なかなか聞かれないできたし、その中でもどういう子どもかっていうので、どのぐらい聞かれるかが違うんだっていう議論もあるんですね。その部分に触れている、すごく大事な発見だなんて思います。

Kさん：確かに。年齢別で分かれてるグループがあったんですが、グループの中で最後の「こういうことを話し合いました」みたいな、主張したい意見を多数決で選

んでたから、しかも最初に「二年目だよ」って言ってる方とかがいたから、その人が例えば手挙げてると、確かにこれがいいのかなみたいな感じでみんな手を挙げてて、それは感じました。本来はたくさん意見のばらつきがあった方がちゃんと子ども会議として成り立ってるのかなと思ったんですが、たくさん意見が出た中でどれを主張したいかっていうときに、目に見える形で多数決だったということも大きかったのかなと思います。

本田先生：すごくその場の様子が詳しくわかって面白いなと思いつつ、今聞いていました。その場の違和感を研究につなげていきたいということがKさんのやりたいことの焦点なのか、それともいろんな国における友達、あるいは博物館の展示とかを見て、子どもの扱われ方みたいなものをもう少し広く調べたいのか。結局何をやっていくかって、無限に選択肢がある中で決めていくのは、Kさんが何をしたいかっていうことにこだわり、問うていくしかないんですけど、もし区の会議の場で起こったことが気になるのであれば、これは民主主義における決め方の問題という、もしかしたら大人とか子どもとかとは別の事柄につながっていくような事柄かもしれないと思いました。Kさんがせっかく頑張ってる研究で明らかにしたいことの一番の中心がKさんにとって何なのかなってことを今考えられるようであれば聞きたいと思うし、それを探すためにもうひと考えしてもらうことが必要になるかもしれないと思いました。

浅井先生：ありがとうございます。お話を聞いていて、Kさんにとってやっぱり子ども会議の出来事がすごく大きいんだなと思うので、そういう意味では、区の方が求めている意見はあったのかとか、他の子たちに参加しててどうだったのか聞いてみてもいいのかもしれないし、そこに一番迫れるのが面白いのかなと思いつつ聞いていました。これはでも、もしかしたら大人の仕事かもしれないですね。子ども議会とか、そうやって子どもの声を聞こうという取り組み自体が日本では割と始まったところで、どうしたら民主的になるのかとか、どうしたら多様な子どもの声を聞けるのかっていうことが重要になってきているんですよね。だから、今のことに少しヒントになるかなと思ってお話するんですが、例えばデンマークの若者会議だと、学校と連携して全ての学校から人が来るようなシステムを作っている。あるいは児童館みたいなところで、いろんなタイプの子に大人側から「参加しない？」という風に声をかけて、多様性を保っていたり、やはりすごい苦労しているところはあると思います。非常に難しい問題で、どうやっていくことができるんだろうと思うところでもあるんだけど。子ども会議みたいなものに直接アクセスしていくっていうのは難しいかな。それが一番Kさんの関心に合うような感じがしているんですが。

本田先生：今浅井先生が言ってくださった子ども会議に焦点化して、例えば日本の中でどんな他に子ども会議があったり、参加者をどう選んでいるのかみたいなことを調べる手もありますね。Kさんの問いって二段階あったんですよね。つまり公立の子が来てない。それに気がつくだけですごいと思うんですけども。来ている子の偏りと、来ている子の中での誰かがピックアップされるっていう、二段階でセレクションされてしまっているのがKさんは気になったんですよね。で、二段階どちらも扱いたい気持ちがあると思いますが、一回の研究でどちらもやるのは難しいかもしれないので、まずはどういうふうに参加者を選んでいるのかとか、来ている子に偏りがいないか、といったことだけでも公表されているデータから調べられないかとかはあるかもしれない。あと、子ども会議だけをテーマにする必要はなくて、例えば学校の中で生徒が学校の校則にどうやって意見を言うていくことができるのかみたいな、そういう子ども会議じゃない場における子どもや生徒の意見の表明の仕方っていうところに少しずらしてみるとかね。とにかく何か場を特定した方がいいと思います。今回はこれでやってみようと絞ることが研究としては成り立ちやすくなるかなと思います。Kさんの問題関心や違和感っていうのは超面白い。大事な違和感であり、今回はどれかに絞るにしても、調べる価値が十分にありますよっていうことは言っておきたいなと思いました。あと、本は読んだ方がいいですよ。やっぱり本1冊読むとそれだけで財産になるから。これだったら読めそうと思うものを頑張って読んでみるっていうことをお勧めしたいと思います。

浅井先生：本当に興味深いがゆえに難しい。今Kさんがぶつかっている問題は、子どもの声を聞く、という問題として捉えたとしても、民主主義の問題として捉えたとしても、研究の世界でも解決ができてない、今まさに研究の世界でも研究されている事柄なので、そういう意味では難しさもあるし、でもチャレンジングでもある。だから自分でこの問題に取り組むんだっていうときに、先ほど本田先生がおっしゃったように、場を決めて絞った方が見えてくることが多いと思うので、それだけ意識して取り組めば、本当に意義深いものになると思います。特に、子どもの声を聞かなきゃって大人がなっている中で、そこに寄与してくれるような、そういう研究になるんじゃないかなと思って期待しています。

Kさん：ありがとうございます。

支援ミーティングを終えて

K さん

私の体験に基づくふわふわとした疑問から、具体的な探究のテーマという観点で今後にも繋げられそうなアドバイスを沢山いただきました。プロの研究者の先生に直接ご指導いただけたことで、子どもを対象とした調査における倫理的な制限など、自分では気づけなかった視点も知ることができました。また、この春休み中に向かった短期留学（カナダ）では、それぞれの文化を尊重しながら共存するための異文化間のコミュニケーションスタイルの違いにますます関心を持ちました。子ども会議は、大人の会議や政策決定の場ではマイノリティになる子どもが、同じ日本語でも違う方法でコミュニケーションする方が本音を引き出しやすい可能性があることを視野に入れて行くと、より有効になるのではないかと感じました。改めて、この度はありがとうございました。

浅井先生

子ども会議に参加した時の K さんの疑問は、とても鋭くて大切なものだと思います。「子どもの声」といった時に、子どもとは誰なのか、どのような子どもなのかという問いを問わなければ、大人が聴きたい声を聴いたり、特定の階層やジェンダー等の子どもの声だけを聴いてしまったりということになる。では、この場合は自治体の政策決定に関わってということになりますが、「子どもの声」を聴くことはどのようにして可能なのか、私たちが方が探究すべき問いを共有してもらった対話でした。どうもありがとうございました。